

2. 審査会講評

令和3年度審査会講評

本年度は、9件の研究論文の提出をいただきました。部門別の内訳は、経営に関するもの1件、歴史・文化部門に関するもの1件、自然科学に関するもの2件、施設管理に関するもの3件、催事等実施報告部門に関するもの2件です。研究者の所属別では協会事務局1件、宮崎科学技術館3件、宮崎市歴史資料館2件、大淀川学習館3件となっています。

研究論文は、理事長以下5名で構成する審査会において、審査要領に定める5つの基準に基づき審査及び評価を行いました。5つの基準とは、①協会の設置目的達成が期待できるか、②研究内容が指定管理者の業務に有効に活用されることにより業務達成へ貢献できるか、③当該年度に研究する緊要度が高いか、④研究が計画どおり実施されているか、⑤論文の構成が適切であるか、というものです。この基準を踏まえた審査会の評価を以下に述べます。

○まず、全体を通して、研究者は、施設の管理運営や事業等の現状を的確に把握し、そこに存在している課題を掘り下げています。そして、取り組むべきものをしっかりと整理した上で、設置目的に沿った改善の方向性を具体的に示しています。

○その上で、研究者の熱い思いが伝わってくる論文があります。「特色ある自然楽習園の実現に向けた取り組み」や「ロケットの魅力発信基地を目指して、サイエンスショーの開発・実践とオリジナル冊子の作成」、「円形水槽における水質改善と生体展示安定化」など、そのテーマの根底には、来館者や市民の興味・関心を高めたいという研究者の熱い思いがあり、常に事業と真摯に向き合い、課題を一つ一つクリアしながら、継続的に充実を図ろうとする姿勢を高く評価します。

○また、喫緊の課題や緊要度の高いテーマに多く取り組んでいます。「モバイルガイドシステムの導入に関する研究」や「事業や展示物等のSDGsへの関連付け」、「宮崎市歴史資料館3館スタンプラリー」、「昆虫食展の実施」、「新展示物4D-VR導入における効果と課題」、「歴史ファンを増やす歴史体験学習講座のあり方」など、現実に即応する力や時代のニーズを捉える力、そして、日頃から改革・改善に取り組む姿勢や意識の高さを十分に感じるものです。

○昨年度同様、新型コロナウイルス感染拡大防止に伴う移動制限等のため、先進地視察の延期や中止等により、計画どおりに実行できず苦勞した研究もあったようです。一方、臨時休館に伴う業務時間を活用し、じっくりと実証実験に取り組むことができた研究もあり、いずれにしても、日常の業務に携わりながら、時間を調整し、研究活動を行い、論文としてまとめた職員の努力に敬意を表します。

以上、研究事業に取り組んだ職員の成果をたたえるとともに、来年度、さらに多くの職員が研究事業にトライすることを期待します。

経営部門

宮崎文化振興協会理科教育施設におけるSDGsへの取組の充実 ～主催事業及び展示物等へのSDGsロゴの添付、活用を通して～

協会事務局 学校連携・教育支援調整監 林 政孝

本研究は、昨年度の「宮崎科学技術館におけるSDGsへの取組の充実」をさらに発展させたものであり、SDGsで取り扱われる課題をより深く理解するための教育プラットフォームとして、当協会の大淀川学習館でも活用を図りながら宮崎科学技術館との相乗効果が期待できる成果となってきたものである。

まず、職員の理解が第一ということで今年度は「大淀川学習館」において職員研修を行い、ロゴ活用や実践への意識付けを行ったことを評価する。昨年度の宮崎科学技術館での経験（研究成果）が生かされたものである。

また、企画展において、具体的にパネル展示やクイズなどを行い来館者の反応を観察した点や、さらには初の試みとして、講演会の実施や教室事業への導入なども実践しており、評価するものである。

今後は、取り組みを行っていない他の施設も含め、協会としてどう取組んでいくかなど、継続性を持って検討してほしい。

歴史・文化部門

確かな歴史ファンを増やす歴史体験学習講座の在り方について

宮崎市佐土原歴史資料館 学習指導員 戸高 達之

本研究は、宮崎市に興味のある市民を育成し、確かな歴史ファンを増やすために「つながり」「分かりやすさ」「やりがい」の3つのキーワードを設定し、本館の歴史体験学習を工夫改善したことをまとめた有意義な研究である。

そのキーワードをもとに、具体的に佐土原の歴史を「武士編」「庶民編」に分け、系統立てたことや、受講者に連続して学びたいという意欲を持たせるために一覧表を作成したこと、また「分かりやすさ」「やりがい」を実感できるよう座学と見学をセットとし、缶バッジや認定証を準備するなど、様々な手立てを考えている点を評価するものである。

そのことから「次も行きたい」「受けてよかった」という実感を持った受講者が増え、リピーターの増加につながったと考えられる。しっかりと手立てを講じ、来館者が増えたことは、今後の運営にも大きく役立つものである。

次年度以降も地域の方たちとのつながりを深めながら、さらに充実した講座となるよう期待する。

自然科学部門

特色ある自然楽習園の実現に向けた取り組み

～様々なチョウが観察できる空間を目指して～

(代表者) 大淀川学習館 主任技師 園田 恵子

様々なチョウを観察することができる自然楽習園を実現するため、昨年は蜜源植物の植栽管理という視点から、また、本年は樹液食のチョウの飼育に視点を当て、チョウの飼育に取り組み、「継続性とイノベーション」という2つの着眼点で行った有意義な研究である。

樹液を滲出させるためにカミキリムシを使っていることや、来館者の安全性を確保するためにコクワガタやヨツボシケシキスイを加えている点など大きな工夫がみられる。加えて、チョウの選定から飼育、放蝶を丹念に行い、樹木だけでなくエサ皿でも実験に取り組み、今後の可能性を探っている。

生き物の研究は様々な要因が影響するため難しさを感じるが、一貫して来館者・観察者視点に立った熱心な取り組みを高く評価する。

今後の方向性として、ゴマダラチョウが飼育の中心になることやエサ皿の設置箇所やその方法が課題となることから、より自然界に近い形でのチョウの吸蜜行動を来館者に提示できるよう、さらに研究に取り組んでほしい。

自然科学部門

円形水槽における水質改善と生体展示安定化に関する研究

(代表者) 大淀川学習館 技師 濱田 洋輔

大淀川学習館内にある二つの円形水槽の機材・ろ過システムを見直し、改良することで、水質改善を図るとともに、生体数を増やし展示の安定化を図る研究で生物を展示する館においては永遠の課題ともいえる重要な研究。

課題整理・改善計画・機材購入、そして機材・ろ過システムの改善、水質検査及び生体導入という一連の取組みを計画的に実施し、大きな手間もかかっている。当然のことながら水生生物の生命線である水質管理が一番大変であり、この改善がこれらの寿命を伸ばすことに繋がっている。特に、酸・アルカリ度、硝酸態窒素、亜硝酸態窒素の分析も連続して行い、詳細なデータを得られたことは大変大きな成果である。さらに、一定水準の海水を手に入れることが困難ななか、飼育環境に適した値を知ることで、今後の水質の限度を想定できるようになった点も大きな進歩である。

これからも継続して来館者の目をより楽しませてくれる魚種の選定など、幅をさらに広げて飼育に取り組んで欲しい。

施設管理部門

宮崎科学技術館の魅力を更に引き出す「モバイルガイド」導入に向けて

～外国人来館者への対応及び展示物解説等の充実～

宮崎科学技術館 副館長兼業務課長 重山 史朗

外国人観光客が増加しているなかにおいて、紙媒体である英語版リーフレットを作成し対応していたが、特に近年は、英語圏のみならずアジア圏域の来館者が増え、多言語化への対応が必要な現状となってきた。そのため紙媒体からモバイルへ解説のツールを移行し、多言語化することで様々な国からの来館者が展示物の内容や原理等をよく理解できる環境を整えるという、この研究の視点は重要。また、来館者のスマートフォンを活用して、展示物解説等の多言語化を図るとともに、障がいのある方々へも展示物等の内容把握の手助けをすることが可能となる内容で、2年前の研究を更に発展させ、「来館しやすい環境をつくる」という重要なテーマをまとめた事を高く評価するものである。

加えて、科学技術の先進的役割を担うと期待される当館の展示や運営の基本姿勢の方向性を示し、大いに参考となるものであり、来年度以降の実用化に向けて、ある程度のロードマップを作成しており、今後の展開に期待が持てる研究内容である。

施設管理部門

ロケットの魅力発信基地を目指して

～サイエンスショーの開発・実践とオリジナル冊子の作成～

宮崎科学技術館 業務課 課長補佐兼天文係長 安達 大輔

新型ロケット“H3”打ち上げという機会を、ロケットの魅力発信基地として宮崎科学技術館がどう捉え、情報発信を継続していくかをよく考えていることが分かる研究である。市民の興味・関心を高めていくために、具体的にサイエンスショーの開発を行い、オリジナル資料配布を行うという当館らしい取組がなされている。

昨年研究した「ロケットロード」に関する情報集約やSNS等での情報発信を継続し、その情報を二次元コードですぐにアクセスできるよう工夫し、アクセス数が大幅に伸びたことは目に見える大きな成果となっている。新型ロケット“H3”の打ち上げが延期になったことから、来年度に向け準備をし、さらに充実したサイエンスショーになることを期待したい。また、当館オリジナルのロケットガイドブック作成については「宮崎ならではの」「当館ならではの」の視点で作成を行い、今後の期待も大きい。

常に、先を見据えた難易度の高い研究であると評価するとともに、来館者や館の職員にとっては分かりやすく、親しみやすいものを作成・計画しており、情報も常に取りに行くという姿勢が見て取れる研究成果である。

施設管理部門

新展示物 4D-VR 導入における宮崎科学技術館への効果と課題について

宮崎科学技術館 業務課 主事 二河 麻貴

この研究は、展示物を新しく入れ替える際に、どのような基準で選定導入していくのか、また、どのように運用していくのかを整理・記録し、次の展示物の可能性も含めて考察し、導入に向けて参考にすることが出来るよう組み立てたものであり、論点が良く整理されている。

導入の経緯について、きっかけとなった来館者の声などを具体的に記している。また、決定の手順や評価のポイント、さらには設置後の問題点と改善点を整理し、職員目で観察した他の展示物への良好な影響もまとめている。特に、利用者の反応を分析し、これまでの年度の入館者数の変化と職員が感じた変化を解りやすく記述し、この効果を検証した点は評価できるものである。

今後は、先進的な展示物を視察・体験したことを当館の展示物にどう生かせるか考え新たに提案し、来館者に一番近い目線で、効果的な展示物の充実を図ってほしい。

催事等実施報告部門

「宮崎市歴史資料館 3 館マスコットキャラクタースタンプラリー」の実施について

(代表者) 宮崎市生目の杜遊古館 学芸係長 福嶋 一恵

みやざき歴史文化館が閉館となり、生目の杜遊古館、佐土原歴史資料館、天ヶ城歴史民俗資料館の今後の運営や歴史 3 館として共同してできることはないか等、問題を提起しながら行った有意義な研究である。

歴史 3 館の共通の課題として「周知はしているものの市民の認知という点では高いと言えない」という現状があり、それを打開するため、マスコットキャラクターを切り口に子どもをターゲットとし、いろいろな仕掛けを施して事業が展開されている。3 館のマスコットキャラクターの活用や参加者へのアンケート調査・評価を 3 館の職員が連携して行い、課題解決に当たったという点でたいへん意義深いものである。

今後も、歴史に興味をもっていただく「ファン」を増やしていくことが、歴史資料館の課題である。まだまだ、これから発展の余地のある歴史資料館であり、これを基盤に様々な取り組みに期待を寄せるものである。

催事等実施報告部門

Edible Insects ～昆虫食展の実施に向けて～

(代表者) 大淀川学習館 学芸員 齋藤 加那子

一般には敬遠されがちな「昆虫食」を題材に企画展を行い、その結果を丁寧にまとめた研究内容となっている。展示構成を①昆虫食を見る②昆虫食の今を知る③昆虫食を学ぶ④昆虫食文化を広げるとして、アンケートを実施し分析を行っている。この分析の際に示すランキングと①から④の分類の関連付けを明確にするとさらに充実したものとなったと考える一方で、企画展の意識調査の結果は、詳細に分析がなされており、評価に値するものである。

特に、「子ども世代に昆虫食への興味関心を波及させていくためには、まず保護者世代に向けて昆虫食の有用性をアピールし、保護者から子どもたちへ昆虫食について話す機会を設けること、そして昆虫食について保護者が「気持ち悪い」等の否定的な言葉を使わないよう心掛けてもらえるよう働きかけていくことが重要である」という結論を導き出している点は大きい。

さらに、今後の展望として「昆虫食に触れる機会の提供」や「外部との連携やミュージアムショップの開設」等を具体的にまとめている。今回の研究で課題も多く見つかったが、SDGsに関連する事柄でもあり、引き続き当館においても研究を継続してほしい。

令和3年度研究事業報告書審査会

公益財団法人宮崎文化振興協会理事長

専務理事兼宮崎科学技術館長

事務局次長兼経営戦略課長

宮崎科学技術館学習指導員

宮崎市民プラザ館長

小泉 英一

熊野 郁夫

安藤 邦恵

荒木 寛

田崎 博伸